

平成24年度
静岡県立美術館自己評価報告書
(一次評価)

平成25年3月
静岡県立美術館

目 次

はじめに	1
・ 自己評価システム全体図	2
・ 自己評価システムの体系	3
第1章 総括的評価	
1 取組方針に対する評価	4
第2章 達成目標等に対する評価	
1 運営基本方針Aの達成状況	6
2 運営基本方針Bの達成状況	13
3 運営基本方針Cの達成状況	17
4 運営基本方針Dの達成状況	19
第3章 今後の取組	
1 平成25年度取組方針	21
2 平成25年度実施計画	23
3 平成25年度以降の達成目標	27

【参考資料1】

展覧会に関する自己点検評価表

【参考資料2】

平成24年度 調査・研究に関する自己点検評価報告書

はじめに

静岡県立美術館では、美術館をとりまく環境が大きく変化する中で、時代の要請に適った公立美術館の実現を目指し、客観的な評価システムの構築とそれに基づく自律的な運営改善に取り組んできた。

平成13年度に職員によるワーキンググループを設置して評価指標に関する検討を開始し、平成15年7月には評価システムの構築に向けて、「静岡県立美術館評価委員会」（高階秀爾委員長）を設置し、本格的な検討を行った。

「静岡県立美術館評価委員会」による平成16年3月の中間報告書「ニューパブリックミュージアム（NPM）の実現をめざして」、平成17年4月の最終提言書「評価と経営の確立に向けて」の2つの提言を踏まえて、県立美術館では、戦略計画方式による自己評価システム（通称：ミュージアム・ナビ）を構築し、平成17年7月から運用を開始した。

また、平成18年9月には、美術館の自己評価に対する2次評価を行う「静岡県立美術館第三者評価委員会」を設置し、評価結果を運営改善につなげる評価の体制を整えた。これまでの自己評価報告書をはじめ、評価に関する資料はすべてホームページ等を通じて情報公開を行っている。

以降、評価指標や取組方針などの見直しを行いながら評価システムの改善に努めてきたが、さらに平成24年度にはガバナンス評価に関するワーキングを行う過程で美術館運営のあり方についても検証を行ったところである。

本報告書は、まず第1章において、館長による全体的な自己評価結果を示した上で、第2章で、4つの運営基本方針それぞれについて、評価指標による達成目標等の実績に基づいて自己評価を行った結果を記載している。第3章では、これらの自己評価結果を踏まえた平成25年度以降の取組について記載している。

皆様には、静岡県立美術館のより一層の業務改善と適切な評価システムの構築に向けた御意見・御提案をいただければ幸いである。

静岡県立美術館 自己評価システムの全体像

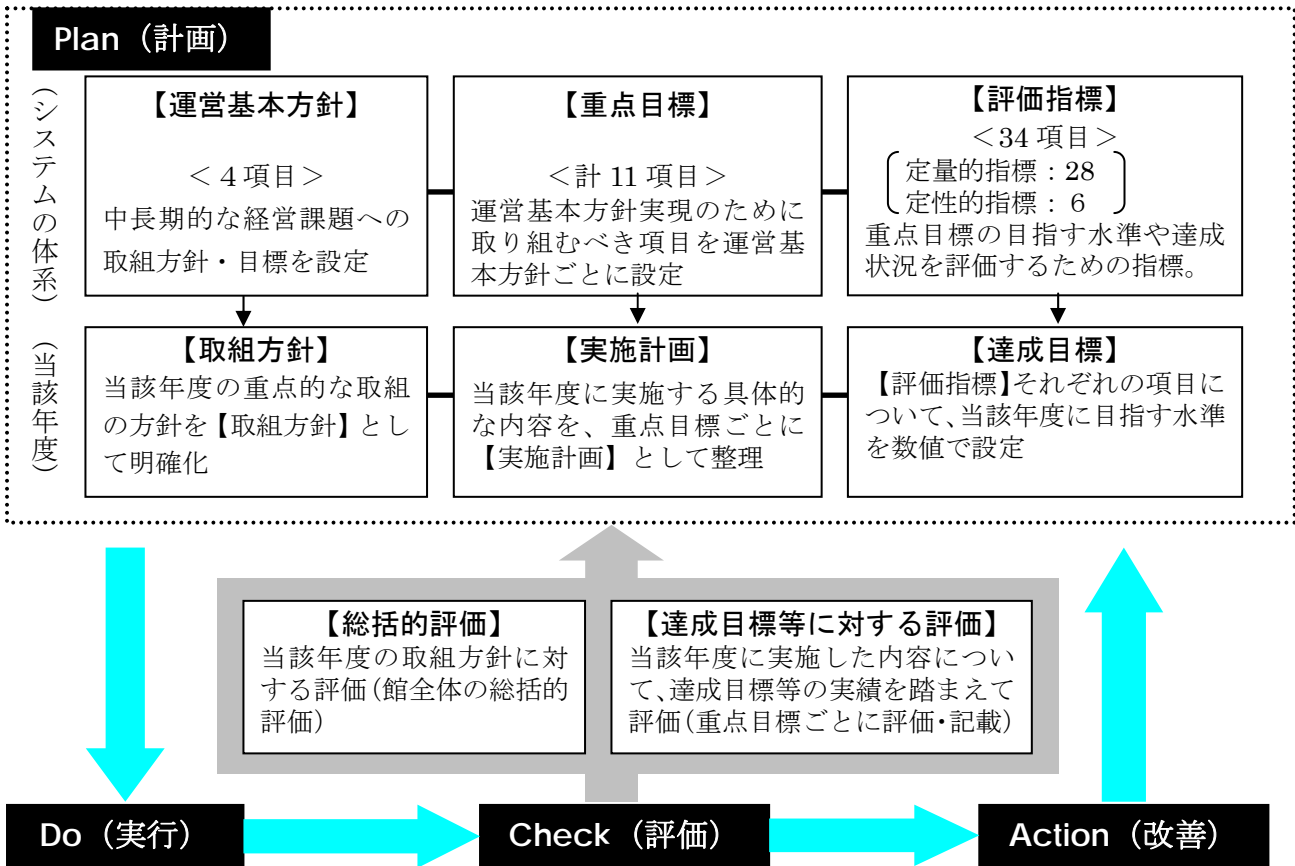
(平成 23 年度～平成 25 年度)

【使 命】 =美術館のめざす姿

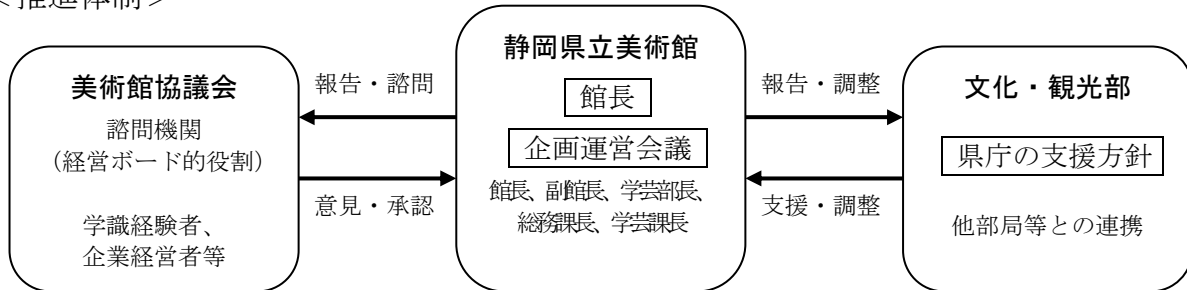
静岡県立美術館は、創造的で多様性に富んだ社会を実現していくために存在します。そのために、コレクションを基盤として人々が美術と出会い新たな価値を見出す体験の場をより多く提供するとともに、地域をパートナーと考える経営を行い、日本の新しい公立美術館となります

<自己評価の流れ>

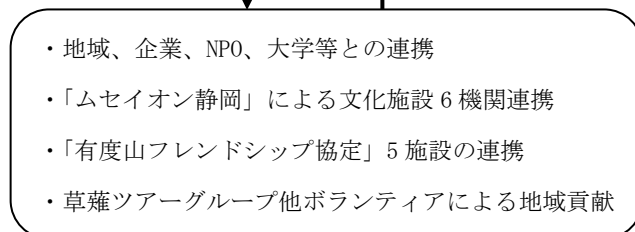
目標管理システム＝P計画→D実行→C評価→A改善のサイクルによる運用



<推進体制>



<協力体制>



自己評価システムの体系

(平成 23 年度～平成 25 年度)

使 命

静岡県立美術館は、創造的で多様性に富んだ社会を実現していくために存在します。そのためにコレクションを基盤として人々が美術と出会い新たな価値を見出す体験の場をより多く提供するとともに、地域をパートナーと考える経営を行い、日本の新しい公立美術館となります。

運営基本方針		重点目標		評価指標	
A	人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します	1	新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します	1	展覧会の来館者数
		2	他の美術館・大学との連携を進め、企画力を強化します	2	自主企画・企画参加型の展覧会の回数
		3	特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用します	3	作品やテーマに興味を持った人の割合
B	地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します	1	質の高い芸術教育と普及のプログラムを開発します	4	展覧会における新規来館者の割合
		2	講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を充実します	5	展覧会に対する外部評価 【定性】
		3	地域住民、企業、NPO 等と連携した美術館活動を充実します	6	調査研究の発表回数
C	さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます	1	広報戦略を策定し、広報の質を高めます	7	内部セミナー・研究会・研修の回数
		2	観光業界などとの連携や新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます	8	他の美術館や大学と連携した取組件数
		3	ロダン館の認知度を高め、来館者を増やします	9	調査研究に関する外部評価 【定性】
D	常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます	1	館内施設を充実させ、満足度を高めます	10	収蔵品展の観覧者数
		2	周辺環境やアクセスの利便を向上させます	11	収蔵品の公開件数
				12	作品購入件数・価格
				13	作品寄贈件数・価格
				14	公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート 【定性】
				15	学校教育と連携した取組数
				16	鑑賞系プログラム数
				17	コレクションを活用したプログラム数
				18	普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート 【定性】
				19	講演会等の開催件数
				20	学芸員のフロアレクチャー等の数
				21	地域住民等と連携した取組数
				22	館内空間を生かした催事の件数・参加者数
				23	地域機関、住民等と連携した取組に関する職員レポート 【定性】
				24	美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合
				25	ホームページのアクセス件数
				26	ホームページの満足度
				27	観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数
				28	広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート 【定性】
				29	ロダン館の入館者数
				30	美術館利用者数
				31	鑑賞環境に対する満足度
				32	レストラン・カフェに対する満足度
				33	ミュージアムショップに対する満足度
				34	来館者のアクセス満足度

第1章 総括的評価

第1章では、平成24年度の静岡県立美術館の運営全体について、「平成24年度取組方針」に基づいて総括的な評価を行った。

1 取組方針に対する評価

平成24年度は、以下6点を取組方針として重点的な取組を行った。

- ① 他館との連携強化による企画展の充実
- ② コレクションを活用した企画展の開催
- ③ 教育普及活動の充実
- ④ 企業等との連携についての検討
- ⑤ 効果的な広報の実施とロダン館のPRに向けた取組
- ⑥ 施設の改善に向けた検討

取組方針別の具体的な成果を以下に示す。

<運営基本方針A：人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を催します>

① 他館との連携強化による企画展の充実

国立西洋美術館と連携し、フランス・ヴァランス美術館のコレクションを活用して、日本初のユベール・ロベールの回顧展を開催した。また東京都江戸東京博物館との共同企画により静岡県や徳川家等とも関係の深い「維新の洋画家 川村清雄」展を開催した。

② コレクションを活用した企画展の開催

今年度は、コレクションを核とした企画展を3本開催した。

① 「静岡県立美術館名品選 カラーリミックス-若冲も現代アートも-

色をテーマとして、当館のコレクションを新たな切り口で再編し紹介する企画展を開催し、若年者層に対して美術作品の魅力を伝えた。

② 「日本油彩画 200年-西欧への挑戦」展

当館所蔵の油彩画コレクションを核として、他の公立美術館から一部作品を借用して、日本人と油彩画の長くて深い関係を作品で検証した。

③ 「江戸絵画の楽園」展

当館コレクションと個人コレクター所蔵作品のコラボレーションにより、江戸時代の美術品を「屏風」「軸」「卷子」等、日本美術独自の形をテーマとして紹介した。

<運営基本方針B：地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します>

③ 教育普及活動の充実

エントランスホールでの「ちょこっと体験」をはじめとして、事業主体を従来の実技系プログラムから鑑賞系プログラムに移行し、鑑賞者に対する作品理解を深めることに努めた。

市内各美術館との連携による「キッズ・アート・プロジェクト」を実施し、子供の美術館来館を促進するとともに、作品の鑑賞理解を深めることに努めた。

④ 企業等との連携についての検討

日本平ホテルと静岡県立美術館、静岡県舞台芸術センター(SPAC)との「フレンドシップ協定」の締結により、企業及び他の文化施設等との連携を強化し、利用者の利便性の向上を図った。

<運営基本方針C：さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます>

⑤ 効果的な広報の実施とロダン館のPRに向けた取組

北海道大学大学院・佐々木亨教授の協力を得て、当館に未だ来館したことのない方々の調査「未来館者調査」を実施し、その動向を把握するとともに、未来館者に対する有効な広報の促進や美術館に対する誇り(シビック・プライド)を向上させるための検討会を開催した。

ロダン館の周知と鑑賞理解を深めるために、「学芸員によるフロアレクチャー」や「ロダンの塗り絵」等、様々なプログラムを実施した。

<運営基本方針D：常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます>

⑥ 施設の改善に向けた検討

利用者満足度において課題のあった「カフェ・ロダン」をリニューアルし、店内の内装やメニューを刷新するとともに、オープニング・イベントとして音楽コンサートを実施した。

また平成24年10月1日～平成25年3月30日まで、ロダン館を閉館し、ロダン館の雨漏り防止のための修繕工事を実施した。

その他、館内各所の施設改善に取り組んだところである。

第2章 達成目標等に対する評価

第2章では、4つの運営基本方針に基づいて実施した内容について、評価指標の実績を踏まえて自己評価を行った結果を記載した。

自己評価システムでは、4つの運営基本方針を実現するために取り組むべき項目を具体化した「重点目標」を設定した上で、重点目標それぞれについて、達成状況を評価するための評価指標（＝「達成目標」）を設定している。

したがって、以下では、重点目標を単位に、達成目標の実績、定性的評価指標の状況を記載した上で、その重点目標の達成状況全体に対する自己評価を記載した。

1 運営基本方針Aの達成状況

【運営基本方針A】

人々の感性を豊かにし、生活に感動をもたらすような展覧会を催します

(1) 新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
1	展覧会の来館者数(人)	266,786	119,416	128,326	170,000	163,533
2	自主企画・企画参加型展覧会の回数(回)	3	2	4	4	5
3	作品やテーマに興味を持った人の割合(%)	85.2	80.9	85.7	88.0	88.7
4	展覧会における新規来館者の割合(%)	21.5	21.4	15.7	20.0	19.5

(定性的指標の状況)

評価指標 5	展覧会に対する外部評価(レビュー)
主な状況	<p>【カラーリミックス展】〈自主企画展〉 時代やジャンルを横断した展示は新鮮で、寄託品も含めたコレクションの見せ方として効果をあげている。(金原委員) 多様なコレクションが蓄積されてきたことこそが評価される。「色彩」というテーマは分かりやすくはあるが、鑑賞者の知的欲求を満たす掘り下げが欲しかった。(潮江委員)</p>
	<p>【日本油彩画 200年展】〈自主企画展〉 コンパクトながらよくまとまっており、コレクションの蓄積と調査研究が反映された企画として評価できる。(金原委員) 油彩による風景表現の変遷が示されたこと、川村清雄らの作品も加えたことにより、独自性のある展覧会となった。また、収蔵品展との関連性が高く評価できる。(山梨委員)</p>
	<p>【ユベール・ロベール展】〈参加型企画展〉 日本では初めてとなる規模の回顧展であり、背景となる同時代の動向も含めて示されていた点が評価できる。論文は充実しており学術的にも優れている。(坂本委員) まとまって紹介される機会のなかった作家の、先駆的な展覧会として高く評価できる。風景表現をテーマとする静岡県美に相応しく、内容も非常に充実していた。(潮江委員)</p>

	<p>【江戸絵画の楽園展】（自主企画展） コンセプトが明快であり、理解しやすい。箱書も含めて展示するなど新しい試みがなされており、また新出資料が多く含まれていた点も評価できる。（金原委員） 作品を「もの」として見るという、日本の絵画に対する新しい見方を提示した点を高く評価する。新出作品の提示も含め、今年度最も野心的な展覧会だと思う。（榊原委員）</p> <p>【維新の画家 川村清雄展】〈参加型企画展〉 ゆかり作家の顕彰のみならず、近代日本洋画史の再考をも促す重要な展覧会であった。美術作品だけでなく豊富な資料も含めた展示は新鮮で、興味深かった。（坂本委員） 江戸博との共同企画により、歴史・美術史双方の視点が組み込まれ、充実した内容となっていた。日本美術近代化の複線的な様相を示した点も高く評価できる。（山梨委員）</p>
--	---

（その他参考指標）

・展覧会の開催状況

（単位：人）

展 覧 会 名		期 間	観覧者見込み	観覧者実績
企 画 展	◎静岡県立美術館コレクション カラーミックス展	4/14～5/27 (39日間)	14,000	11,573
	○日本油彩画 200年展	6/9～7/22 (38日間)	10,000	8,524
	○ユベール・ロベール展	8/9～9/30 (46日間)	19,000	13,541
	◎江戸絵画の楽園展	10/7～11/18 (37日間)	13,000	10,758
	インカ帝国展	11/27～1/27 (51日間)	71,000	99,411
	維新の洋画家 川村清雄	2/9～3/27 (40日間)	15,000	10,209
収蔵品展		年 間	21,000	9,517
計			162,000	163,533
移動美術展	富士宮市民文化会館	9/12～9/29 (20日間)	8,000	2,516
	磐田市新造形創造館	10/26～11/4 (9日間)		828
合 計			170,000	166,877

◎は自主企画展 ○は参加型企画展

・自主企画展等の個別分析

（単位：％）

区 分		ユベール・ロベール展	江戸絵画の楽園展	維新の洋画家 川村清雄展
観覧者の性別	男 性	39.1	42.1	38.8
	女 性	60.9	57.9	61.2
観覧者満足度		93.4	92.2	94.3
リピート観覧者		74.7	84.0	82.6
新規観覧者		25.3	15.9	17.4

区 分		ユベール・ロベール展	江戸絵画の楽園展	維新の洋画家 川村清雄展
新規観覧者満足度		92.7	90.4	95.6
作品やテーマに興味を持った人の割合		87.0	91.3	88.1
地域別観覧者数	中 部	53.9	59.1	60.9
	西 部	18.1	13.9	16.3
	東 部	16.2	15.0	15.6
	県 外	11.8	12.0	7.2

<分析と評価>

- ・ 展覧会の来館者数は、目標の 170,000 人に対して 166,877 人と、ほぼ目標を達成した。移動美術展を含めると、達成率は 98.1%であった。
- ・ 自主企画・企画参加型展覧会の回数は 5 回となり、目標の 4 回を上回った。「インカ帝国展」を除くと、すべての企画展に当館学芸員が深く関わり、収蔵品も有効に活用できた。「ユベール・ロベール」展では国立西洋美術館、「川村清雄」展では江戸東京博物館と、他館と共同企画をすすめ、調査研究、原稿執筆、展覧会図録の編集など、連携の実績を新たに築くことができた。
- ・ 「川村清雄」展では、展覧会図録が美術館連絡協議会の優秀カタログ賞に選出され、当館学芸員の調査研究の成果が評価されることになった。
- ・ 「カラーリミックス」展では、古美術から現代美術にいたる収蔵品約 90 点を、「色」の効果の観点から再編集する試みを実施した。時代とジャンルにとらわれない展示は、伊藤若冲と今井俊満が隣り合うなど、自由な組み合わせとなった。また、準備段階で「カラーリミックス」という名称は難解であるという意見も聞こえたが、あえてこの名称を選択することで若い世代の来館者増加を目指した。
- ・ 「インカ帝国展」は知名度の高い異文明を紹介する企画展であったが、目標の 71,000 人に対して 99,411 人と目標を大きく上回り、平成 24 年度の来館者数と収入の拡大に貢献した。
- ・ ロダン館が天井改修工事により下半期休館となったこともあるが、収蔵品展の来館者数は、目標の 21,000 人に対して 9,517 人と、目標の 45.3%にとどまった。
- ・ 観覧者満足度は、3 本の企画展（「ユベール・ロベール」「江戸絵画の楽園」「川村清雄」）とも、90%を上回った。

(2) 他の美術館・大学との連携を進め、企画力を強化します

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
5	調査研究の発表件数 (回)	14	11	18	10	12
6	内部セミナー・研究会・研修の回数 (回)	12	14	12	14	12
7	他の美術館・大学と連携した取組件数 (件)	3	4	3	5	5

※調査研究の発表件数とは、主な論文(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表等)の発表件数である。

なお、詳細は「別添参考資料1 平成22年度 調査・研究に関する自己点検評価報告書」を参照。

(定性的指標の状況)

評価指標 9	調査研究に関する外部評価 (レビュー)
主な状況	<p>①研究紀要 小針由紀隆「ユベール・ロベールとナポリ近郊ポッツオーリのセラピース神殿」 18世紀の廃墟画について、現地調査と膨大な関連文献を照合させて、その特性を指摘した好論文である。日本で手薄であった15～18世紀の西欧風景表現研究の大きな欠陥を補うものとして評価できる。(坂本委員) 目配りの利いた研究報告によって、作家の表現意図の再検討、さらには鑑賞の仕方の変更をも導き出した成果は、作家研究だけでなく18世紀風景画の特性にも深く言及する成果であり、重要な意義を持つ。(潮江委員)</p> <p>②研究紀要 三谷理華「ラファエル・コランの極東美術コレクション—新出旧蔵品について」 ジャポニズム研究の進展に貢献する重要論文である。関連資料や文献紹介も充実しており、実証的である。(坂本委員) コランの書画コレクションを紹介する貴重な資料であり、コラン研究に新たな視点をもたらしている。筆者のこれまでの研究および関連展覧会の開催といった地道な蓄積の成果である点を高く評価したい。(山梨委員)</p> <p>③研究紀要 村上敬「川村清雄関連文献解説目録」 幅広い研究上の土台を用意する、大変意味のある仕事として評価したい。(坂本委員) 展覧会開催の基礎調査となった文献目録作成およびそれら文献調査の成果を、多くの人々にアクセス可能にした本稿は、今後この作家について調べようとする人々に対し、広く、長く資するものとなる。美術館の基礎的作業として高く評価できる。(山梨委員)</p> <p>④研究紀要 川谷承子「1960年代後半の「地方の前衛」と、グループ「幻触」の1970年代～90年代の評価について」 もの派との比較を通じて、グループ幻触の活動の特質を明らかにしている点が評価できる。展覧会に向けた基礎研究として、今後の深化を期待したい。(金原委員) 地域ゆかりの作家、創作活動を、制作の場に密着した視点から調査しつつ、地域内に留まらない発信の仕方を深く考察している点が貴重である。(山梨委員)</p>

<分析と評価>

- ・ 調査研究の発表件数は12件に達し、目標の10件を上回った。
- ・ 「日本油彩画200年」展では、静岡大学人文学部と連携した。会期中、人文学部の学生によるギャラリートークを実施し、大学教員と美術館学芸員と一緒に学生の指導にあたった。比較言語文化を専攻する学生は言葉のみに依りがちだが、当館で絵画作品をトークの対象とすることで、視覚からの刺激を言語化する新たな体験を積むことになった。
- ・ 「ユベール・ロベール」展では、準備段階から第一会場の国立西洋美術館と企画について議論を重ね、当館はロベールのイタリア留学時代とそれに先立つ先輩美術家たちのセクションを請

け負うことになった。展覧会の構成、出品リストの確定、カタログ原稿の分担・執筆・編集、知識と情報の交換など、当館にとって有意義な連携を果たすことができた。

- ・「川村清雄」展では、企画の構想段階から江戸東京博物館と連携した。連携にあたっては、両館の専門性、すなわち江戸博が「歴史」、当館が「美術」という相互の守備範囲を尊重し合うことを基本とした。その結果、川村清雄ならびに幕末から明治の関連歴史文書を解説し、解説パネルとして配置するなど、展示や図録に博物館学芸員の力量を十分発揮することができた。また、繰り返しとなるが、本展図録の出来栄えが高く評価され、美術館連絡協議会の優秀カタログ賞を受賞した。

(3) 特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用します

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
8	収蔵品展の観覧者数 (人)	12,526	18,042	14,506	21,000	9,517
9	収蔵品の公開件数 (貸出し含む) (件)	337	496	647	500	143
10	作品購入件数・購入価格 (件・千円)	4 8,450 (86,000)	3 133,350 (113,400)	1 5,000	-	2 5,086
11	作品寄贈件数・評価価格 (件・千円)	2 92,500	20 22,950	36 35,750	10 10,000	17 42,300

10 ()は、基金対応額

(定性的指標の状況)

評価指標 14	公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート
主な状況	<p>【西洋】 カミーユ・ピサロの《ライ麦畑、グラット＝コックの丘、ポントワーズ》が、「カミーユ・ピサロと印象派—永遠の近代」展に出品された。印象派の手法を取り入れた、ピサロ中期の代表的な1点として、日本では数十年ぶりの本格的なピサロの大個展で公開・紹介されたことは、風景画の収集を丹念に続けてきた当館の成果を物語るものと言えよう。</p> <p>【日本画】 小林清親《東京名所図》から6点が「郷愁の浮世絵師 清親と安治」展（山口県立萩美術館・浦上記念館）に出品され、作家の画業における位置付けのみならず、異版との比較検証の好機となった。また、「江戸の旅—街道と風景」展（仙台市博物館）に狩野探幽《富士山図》はじめ計10件が出品され、旅と風景表現との関わりを辿る意欲的な展覧会において改めてその重要性が確認された。「我ら明清親衛隊」展（板橋区立美術館）では、谷文晁《連山春色図》など2点が出品され、江戸時代における明清絵画の受容を示す作品として紹介された。作家個人の枠を超え、時代を語る作品としての位置付けがなされたことは意義深い。</p> <p>【日本洋画】 川村清雄作品5点が「維新の洋画家 川村清雄展」（江戸東京博物館、当館）に出品された。同展は18年ぶりの川村清雄大回顧展として高い評価を受けた。また、歴史博物館との共催ということもあり、歴史的な文脈のなかにあらためて当館所蔵川村作品を位置づける契機ともなった。</p> <p>五姓田義松《富士》、児島善三郎《箱根》の2作品は「広島県立美術館名品選2 風景表現の系譜」に出品された。本展は広島県立美術館との相互協定の一環として開催されたもの。公立美術館がそれぞれの持ち味を示しつつより高次のコレクション展を行うという先駆的な試みに、本県ゆかりの画題を描いた上記作品も一定の役割を果たしたといえよう。</p> <p>【現代】 石田徹也作品20点が、「石田徹也展」（福岡市、三菱地所アルティアム）に出品された。静岡県出身の美術家の作品を地元以外で紹介し認知度を高める好機となり、好評を博した。「GUN—新潟に前衛があった頃」展には、静岡での前衛芸術グループ「幻触」の作家4名の作品5点を出品した。あまり知られていない地方の前衛相互の結びつきを、戦後美術史の文脈の中で検証することに寄与したという点で、意義が深かった。「柳澤紀子展—転生の渚—」への柳澤作品11点の出品は、静岡出身の美術家の顕彰へとつながるものであった。</p>

(参考指標)

作品購入の内容

作者名	作品名	材質・形状	価格(単位:円)
佐分眞	雪のグリュンデルワールド	キャンヴァス、油彩	2,350,000(税込み)
ジャン・バルボー	最も美しき古代ローマのモニュメント	紙、エッチング(書籍体)	2,735,950(税込み)

<分析と評価>

- ・収蔵品展の観覧者数は、目標の21,000人に対して9,517人、達成率は45.3%であった。
- ・所蔵品の公開件数については目標を下回った。企画展との関連性に配慮しながら展示作品を選定した結果、磯辺行久氏の大作など、作品の間隔を広くとって展示するケースが多かったためだが、反面、迫力ある作品を効果的に展示することで、作品の持つ力を十全に鑑賞してもらうことができ、子どもワークショップなどを通じて教育普及事業などにも貢献できた。
- ・作品購入件数は一件増加した。佐分の初期油彩作品、ジャン・バルボーの版画作品、ともに、特色あるコレクション形成に大きく寄与するものとする。
- ・本年は個人からの寄贈であったが、どの作品も、当館のコレクションを補強、補完する上で欠かせない作品であり、これらの作品が加わったことは、当館のコレクションの意義を高め、活用の幅を広げるものである。

2 運営基本方針Bの達成状況

【運営基本方針B】

地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

(1) 質の高い芸術教育と普及のプログラムを開発します

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
12	学校教育と連携した取組数 (件)	348	305	530	350	297
13	鑑賞系プログラム数 (件)	13	13	20	13	19
14	コレクションを活用したプログラム数 (件)	19	17	19	16	19

(定性的指標の状況)

評価指標 15	普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート
主な状況	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞教育指導者研修会や出張美術講座を継続的に行ってきたことにより、鑑賞プログラムを中心に、学校教育との連携機会が増えてきた。 ・実技系プログラムでは、企画展・収蔵品展にかかわりのある内容の実施を心がけることにより、参加者の鑑賞・制作両面からの美術への理解が深まるとともに、美術館ならではのプログラムとなった。 ・「ちょこっと体験」は好評で、利用数も伸びており、手軽な制作とリンクした鑑賞教育の一助となっている。 ・10月から3月までのロダン館工事休館により、ロダン館関連のプログラム利用が減となった。

(参考指標の状況)

普及プログラムの実績 (定量的評価の内訳) ※イメージとして21年度の実績を事例とした

プログラム名	学校教育と連携した取組数	人数	鑑賞系プログラム	コレクションを活用したプログラム
特別講演会			○	
美術講座			○	○
鑑賞講座			○	○
学芸員によるフロアレクチャー			○	○
ボランティアのギャラリーツアー			○	○
一般向けオリエンテーション			○	
学校団体向けオリエンテーション	44	3,778	○	
学校団体向けボランティアとの鑑賞ツアー	24	1,690	○	○
ロダン体操	0	0	○	○
タッチツアー			○	○
展覧会関連普及事業 (観覧者対象) (やぐらプロジェクト、《考える人》折り紙プロジェクト)			○	○

プログラム名	学校教育と連携した取組数	人数	鑑賞系プログラム	コレクションを活用したプログラム
展覧会関連普及事業（学校対象） （エスパルスドリームプラザ夏の工作体験 「かざぐるま」・レプリカ展示、志太地区造形教育研究会教員研修会）	2	136	○	
音のかけらワークショップ	2	10	○	○
美術館の秘密を探れ	14	758		
ロダン館ななふしぎ	6	500	○	○
色彩・工作アトリエ（収蔵品展）				○
ロダン館コンサート			○	○
ロダン館デッサン会				○
ロダン館デッサン実習	2	84		○
ちょこっと体験（四種）			○	○
実技入門講座、実技講座、技法セミナー			○	○
ART!、ARU?（美術部等団体参加校あり）	3	572		
出張美術講座	20	1,405		○
教員支援（研修等）	3	14		
出張粘土教室（H24 実施予定）	4	182		
粘土教室、絵具教室	117	6,975		
粘土貸出し	6	6		
レプリカ貸し出し	10	10	○	○
教員サポート（授業相談等）	20	20		
先生向け粘土・絵の具教室研修会	14	14		
職場体験・インターンシップ	6	19		
合計	297	16,173	18	18

<分析と評価>

- ・ 粘土・絵の具教室など体験系プログラムの人気も依然として高いが、一方で学校向けのオリエンテーションやボランティアとの対話鑑賞の依頼もコンスタントにある。今後、鑑賞系のプログラムの開発や鑑賞教育支援等の推進が必要と考えられる。
- ・ ロダン館工事休館による「ロダン館ななふしぎ」等休止の影響もあったが、いろいろな職種職場見学への関心の高まりから、美術館の舞台裏を見学する「美術館の秘密をさぐれ」の数が増えた。こうした「美術館」そのものを紹介するプログラムの展開を工夫していくことも、今後求められることになる。
- ・ 平成24年度から教育普及担当職員が定数の1名（H21~23は2名）に戻ったことに伴い、教育普及事業運営においては、質を損なうことなく満足度の高いプログラム推進の工夫が継続的に求められる。

(2) 講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を企画し開催します

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
16	講演会等の開催回数 (回)	179	173	170	210	174
17	学芸員のフロアレクチャー等の数(回)	123	86	105	20	92

※17 学芸員のフロアレクチャー等の数は、下記の参考指標等の状況の1～7までの積算である。

(参考指標の状況)

講演会等の開催回数 (プログラム別) ※イメージとして21年度の事例を記入した。

	プログラム内容	回数
1	学芸員 オリエンテーション	13
2	学芸員 美術講座	5
3	学芸員 鑑賞講座	2
4	学芸員 フロアレクチャー	49
5	学芸員 出張美術講座【小・中・高校等へ出張】	20
6	学芸員 フロアレクチャー (富士宮市民文化会館、磐田市新造形創造館)	3
7	特別講演会【外部講師による】	6
8	特別講演会【館長による】	1
9	ギャラリー・トーク【外部講師による】	3
10	「カラーリミックス」展ボランティアギャラリーツアー	12
11	「日本油彩画 200年展」ボランティアギャラリーツアー	12
12	「江戸絵画の楽園」展ボランティアギャラリーツアー	16
13	収蔵品展ボランティアギャラリーツアー	30
14	ロダン館ボランティアギャラリーツアー	2
	合計	174

(注)「2 学芸員 美術講座」は、美術作品について美術史の知識等を用いながら解説をする講座であり、「3 学芸員 鑑賞講座」は、親子の鑑賞者に対して、解説を交えながら、作品をじっくりとご覧いただく講座である。

<分析と評価>

- ・ 講座・講演会等の回数は、目標には至らず、前年度並みであった。内訳は、学芸員のフロアレクチャーが9回、美術講座が2回増え、鑑賞講座が1回、出張美術講座が15回減少した。フロアレクチャーの増加は「インカ帝国」展で、土曜日の夜間開館時に学芸員が作品解説を行ったことが主な要因である。また、出張美術講座の減少は、教育普及担当職員が本年度より2名から1名になった点が、要因として考えられる。一方で、ボランティアギャラリーツアーは前年よりも19回増え、ボランティア活動の意識の高さをうかがわせる。
- ・ 親子、ファミリー向け講座は、新規来館者開拓のためにも、プログラムに組み込んでいく継続的努力が必要である。

(3) 地域住民・企業・NPO等と連携した美術館活動を充実します

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
18	地域住民等と連携した取組数 (件)	6	6	6	4	8
19	館内空間を生かした催事の件数・参加者数(件・人)	62 4,908	34 6,506	83 13,929	90 5,500	59 13,901

(定性的指標の状況)

評価指標 20	地域住民等と連携した取組に関する美術館職員のレポート
主な状況	<ul style="list-style-type: none"> 美術館ボランティア草薙ツアーグループによるお茶会は、来館者サービス、地域連携の活動として各展覧会で実施した。 地域創造との共催により平成 25 年 3 月 6～8 日の 3 日間、当館を会場として公立美術館職員向けの研修「アートミュージアムラボ」を開催した。 企画展「日本油彩画 200 年」では、地元静岡大学との共同企画「大学生によるギャラリー・トーク」を実施した。 ロダン館再始動セレモニーでは、NPO 法人「音楽の架け橋メセナ静岡」の協力により、記念コンサートを開催した。 静岡市郊外の有度山地域に立地する三施設（県立美術館、SPAC、日本平ホテル）間で相互に連携・協力し合うフレンドシップ協定を締結した。 ムセイオン静岡協働イベント「ふじのくに文化の丘フェスタ」では、カフェ・ロダンリニューアル記念コンサートとして、カフェでのライブ演奏と展示会場での学芸員による特別解説を実施した。

<分析と評価>

- 館内空間を生かした催事の件数は、目標の 90 件に対して 59 件、参加者数は 5,500 人に対して 13,901 人であった。件数の減少は、大規模修繕工事によるロダン館の休館が主な要因である。ロダン館に設置した展望台から《地獄の門》《考える人》を鑑賞する「やぐらプロジェクト」は昨年に続けての実施となったが、期間中に 10,000 人を超える参加者があり、ロダン彫刻の理解を深めてもらうためにも、今後も新しい鑑賞方法の提供を続けていく必要がある。
- 美術館活動の連携については、県立文化施設によるムセイオン静岡の協働イベント「ふじのくに文化の丘フェスタ」への積極的な参加や美術館周辺地域に立地する三施設（県立美術館、SPAC、日本平ホテル）の相互連携・協力により、来訪者の満足度向上を図るためにフレンドシップ協定を締結するなど、地域を意識した他の文化施設あるいは観光分野等との連携事業は評価できる。今後は「連携」をとおした更なる文化の情報発信につながる活動を検討していきたい。

3 運営基本方針Cの達成状況

【運営基本方針C】

さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます

(1) 広報戦略を策定し、広報の質を高めます

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
21	美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合(%)	69.4	66.5	70.6	70.0	71.6
22	ホームページへのアクセス件数(件)	353,500	147,225	419,000	170,000	370,660
23	ホームページの満足度(%)	74.3	71.9	71.7	70.0	71.6

<分析と評価>

- ・ 24年度と23年度を比較すると「美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合(%)」は増加、「ホームページへのアクセス件数」はやや減少しているが、「ホームページの満足度(%)」は、横ばいである。21年度末にホームページのリニューアルが完了して以来、アクセス件数は高めで安定してきている。

(2) 観光業界などとの連携や新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
24	観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数(件)	-	-	5	1	1

(定性的指標の状況)

評価指標 25	広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート
主な状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 24年7月発行東京都静岡県人会の会報誌に当館の紹介記事を掲載。 ・ 「日本油彩画200年」において静岡大学人文学部客員教授平野雅彦氏と同学部大学生との共同企画を実施。大学生によるギャラリー・トーク、会期中のイベント告知等をするブログの発信、フライヤーの配布を実施。 ・ 協定を締結している広島県立美術館のブログで当館の実技室プログラムを紹介。 ・ 「ふじのくにしずおか観光大商談会 in 名古屋」に、日本平ホテル、日本平ロープウェイ（久能山東照宮）とチームを組んで参加。3施設を結んだ観光ルートの周知に努めた。 ・ 静鉄グループと県立美術館の連携強化静鉄フリーチケットとインカ展のセット券販売 ・ 「川村清雄」展において作品を印刷したブックカバーとしおりを作成し、静岡市内の書店を通じ、書籍購入者に配布してもらった。

<分析と評価>

- ・ 大学生に美術館の広報に関わってもらうことは、若年層の来館者を増やすことにつながるもので、今後も継続して行っていく。また、観光大商談会に日本平周辺の観光施設である日本平ホテル、日本平ロープウェイ（久能山東照宮）と連携して当館の広報を行ったように、今後も観光諸団体との連携を進めていく。

(3) ロダン館の認知度を高め、来館者を増やします

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
26	ロダン館の入館者数(人)	131,240	45,751	63,102	80,000	26,809

<分析と評価>

- ・ロダン館の入館者数は、目標 80,000 人に対し、26,809 人で達成率 33.5%であった。これは昨年 10 月から 3 月末までの半年にわたる施設の大規模修繕工事のため休館していたことに加え、集客が見込める文明展開催時期（11 月下旬～1 月下旬）とロダン館休館時期が重なったことが大きな要因であると考えられる。
- ・ロダン館の再始動を記念したセレモニーでは記念コンサートや学芸員の作品解説を実施し、316 名の来場があった。この再始動を機会にロダン作品、ロダン館を一層身近に感じていただくための効果的な PR 活動をすることができた。
- ・今後は、ロダン館開館 20 周年、あるいはロダン没後 100 年（2017 年）を見据えた、新たな取り組みを検討する必要がある。

4 運営基本方針Dの達成状況

【運営基本方針D】

施設の改修を推進し、美術館のアメニティを高めていきます

(1) 館内施設を充実させ、満足度を高めます

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
27	美術館利用者数（内訳）（人）	459,489	221,185	284,097	400,000	304,654
28	鑑賞環境に対する満足度(%)	89.8	84.4	90.4	90.0	92.5
29	レストラン・カフェ利用者の満足度(%)	53.8	68.8	71.3	70.0	81.4
30	ミュージアムショップ利用者の満足度(%)	85.6	84.4	86.8	85.0	82.8

(参考指標の状況)

・利用者数の内訳

(単位：人)

区 分	H24 目標	H24 実績
展覧会観覧者数	162,000	163,533
移動美術展	8,000	3,344
教育普及プログラム参加者数	21,000	24,927
ミュージアムコンサート入場者数	300	316
県民ギャラリー入場者数	95,700	43,157
講堂入場者数	17,000	9,475
レストラン・カフェ利用者数	55,000	40,334
ミュージアムショップ利用者数	34,000	17,652
図書閲覧室利用者数	7,000	1,916
合 計	400,000	304,654

<分析と評価>

- ・美術館利用者数が、目標の400,000人に対して、304,654人であり、目標を大きく下回った。
- ・ロダン館は老朽化の影響で屋根のシーリング等に不具合があり雨漏りが発生していたため、屋根の全面的な防水改修工事を実施した。
- ・劣化の激しい点字ブロックの改修を行うとともに、車椅子の経路を確保するため、スロープ横の植栽を撤去して歩道を整備した。
- ・カフェ・ロダンを居心地よく魅力的な空間にするため、プロのデザイナーにプランニングを委託してリニューアル工事を行った。
- ・老朽化している高架水槽の取替え工事を実施して飲料水の安全確保を図った。

(2) 周辺環境やアクセスの利便を向上させます

(達成目標の実績)

評価指標		H21	H22	H23	H24 目標	H24 実績
31	来館者のアクセス満足度 (%)	75.8	78.0	81.8	80.0	80.0
		72.0	75.8	69.2		83.1

※ 実績の上段：公共交通機関で来所した方、下段：自家用車で来所した方

<分析と評価>

- ・ 「来館者のアクセス満足度」については、公共交通機関利用者の満足度が目標 80%に対して 80.0%で目標を達成した。自家用車の満足度も 83.1%と目標の 80%を上回る結果となった。
- ・ 老朽化により路盤の沈下等により不陸(凹凸)が生じていた第 1 駐車場について、自家用車で来館する方の利便性向上のため舗装改修工事等を実施した。
- ・ 公共交通機関利用者からのアクセスの問合せに対しては、「JR 草薙駅から 20 分間隔で運行する 100 円バスを利用するのが便利であること」を引き続き周知するよう配慮した。
- ・ 駐車場の確保について、来館者の多い企画展の土、日、休日には、隣接する県立大学の職員駐車場を借用し、美術館来館者の利便性の向上を図った。

第3章 今後の取組

第3章では、自己評価結果を踏まえた平成25年度の取組について記載している。

まず、平成25年度における重点的な取組に関する考え方を、運営基本方針ごとに、「平成25年度取組方針」として明らかにした上で、具体的な実施内容を重点目標ごとに「平成25年度実施計画」として整理した。

平成25年度 県立美術館の取り組み方針

<全体方針>

○地域をパートナーと考える美術館運営、中長期展望を検討

地域と連携した美術館運営が推進できるよう、鋭意準備を進めていく。

有度山地域の施設が連携するフレンドシップ協定をもとに、美術館周辺の地域の文化、観光の情報発信を進めていく。文化・教育機関が連携するムセイオン静岡では、一定テーマのもとに新たな講座を開設し、地域の文化・芸術への関心をさらに高めていく。

地域における人材の掘り起こしや、地域の団体・個人とのネットワーク構築を進め、その成果を美術館運営に活かしていく。

さらに、ワーキングを設置し、施設整備、展覧会、広報、美術館の中長期展望について、包括的に検討していく。

<運営基本方針A：人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を催します>

① 新たな視点を取り入れた展覧会の開催

これまでも約2,600点のコレクションを活用した、収蔵品展、企画展、移動美術展を開催しているが、本年度は、これまで十分紹介することができなかった当館所蔵の現代作品を有効活用する企画展を2本、富士山世界文化遺産登録という県の重要施策と呼応する日本画の企画展を1本開催する。

その一方で、現在世界的な注目を集める日本人アーティストの個展と、絵画と文学両分野に跨る企画展を他館との共同企画によって実現する。

② 県立美術館開館30周年及びロダン没後100年を見据えた事業の検討

現在、静岡県内では、2015年が徳川家康没後400年にあたることから、徳川家関連の文化や歴史に焦点をあてた諸事業が、学会や商工会議所等で計画・実施されている。当館ではこうした現況を踏まえ、開館30周年にあたる2016（平成28）年度の事業として、「徳川250年の文化の豊かさ」を再考する展覧会の開催を、県文化・観光部、その他の関連機関と共に検討していく。

また、2017（平成29）年は、オーギュスト・ロダン没後100年にあたることから、新たなロダン展開催の可能性を海外美術館に打診しながら探っていく。2014（平成26）年は、ロダン館開館20年目にあたるため、館内の鑑賞環境整備やロダンに関する学究活動など、展覧会以外の諸事業も推進していく。

〈運営基本方針B：地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します〉

③ 鑑賞教育を中心とした教育普及の充実

当館の教育普及活動の転換期と捉え、中長期的な視野にたった今後の教育普及の方針について検討する。平成21年度から23年度にかけて「鑑賞教育指導者研修会」を開催して人材育成に努めてきた。今年度は学校教員の当館美術講座への参加による新たな人材育成、教育普及プログラムの開発など事業の充実に取り組む。

また、キッズアートプロジェクトを基盤に拡充した県内の参加館園と連携し、小学生の鑑賞教育の促進を図る。

〈運営基本方針C：さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます〉

④ 美術館活動の戦略的広報の推進

当館では、企画広報を担う広報委員会を総務課・学芸課の職員で構成し、広報の共通認識を持ち、美術館活動広報を推進している。

企画展では、主たる対象の絞り込み、その年代に合わせたコミュニケーション・メディアの活用、商業活動と連携した広報等を企画展実行委員会、県広報課、商業施設との協働により、効果的な広報を推進していく。

さらに、昨年度調査を行った「未来館者調査」の分析を進め、新たな顧客の開拓や、美術館活動をコンパクトに紹介するCSRレポートの作成を検討する等、美術館への認知・理解を促進する広報に力点を置く。

⑤ ロダン館の新たな試み

ロダン館を中心にした、県立美術館の観光ルート化の具体的な効果を出すために、有度山フレンドシップ協定（県立美術館、日本平動物園、久能山東照宮、県舞台芸術センター、日本平ホテル）を活用した観光プログラムを旅行企画会社に提案し、実現化を図る。

また、ロダン館と異分野とのコラボレーションによるイベントの継続のほか、館内外の人材によりロダン館の新たな試みを検討し、できるところから実現を図っていく。

〈運営基本方針D：常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます〉

⑥ 施設環境の改善によるサービスの向上

館内レストラン及びカフェについて、両施設のコンセプトを明確にし、メニューを刷新し、来館者により上質のサービスを提供する。また、来館者の利便性を高めるため、イヤホンガイド等情報機器の導入を進める。

さらに「施設維持補修中長期計画」を策定し、計画的なメンテナンスを推進し来館者の満足度向上を図るとともに、美術館案内表示等周辺環境整備について検討を行う。

2 平成 25 年度実施計画

【運営基本方針 A】

人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を催します

(1) 新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します

- ・ 夏目漱石と美術との関わりの中容を実作品と資料によって明らかにする。
(「夏目漱石の美術世界」展)
- ・ 現代日本を代表する美術家として国際的に活躍する草間彌生の最新の創作活動を紹介する。
(「草間彌生」展)
- ・ 古より信仰の対象とされ、様々な芸術活動の源泉になってきた富士山の文化的意義を示す。
(「富士山の絵画」展)
- ・ 静岡を基盤に活動し、その後の現代美術に大きな影響を与えたグループの全貌を作品や当時の資料をもとに明らかにする。
(「グループ幻触」展)
- ・ 寄贈された二見彰一のコレクションを活用して、回顧展を開催する。
(「静岡県立美術館所蔵 二見彰一」展)

<平成 25 年度企画展開催計画>

展 覧 会 名		期 間	観覧者数見込
企 画 展	草間彌生-永遠の永遠の永遠	4/13～6/23 (63 日間)	45,000
	夏目漱石の美術世界	7/13～8/25 (37 日間)	36,000
	富士山の絵画	9/7～10/20 (38 日間)	14,000
	ふじのくに芸術祭 2013	10/29～11/15 (16 日間)	17,000
	静岡県立美術館所蔵 二見彰一展	11/22～1/19 (47 日間)	13,000
	グループ幻触石子順造 1966～1971 年	2/1～3/23 (44 日間)	12,000
収蔵品展	年間	23,000	
計			160,000
移動美術展(小山町総合文化会館)		9/19～9/29 (11 日間)	10,000
移動美術展(袋井市月見の里学遊館)		10/18～10/30 (13 日間)	(2ヶ所)
合 計			170,000

(2) 他の美術館・大学との連携を進め、企画力を強化します

- ・他の美術館と共同して調査・研究及び巡回展を実施する。
(「草間彌生」展、「夏目漱石の美術世界」展)
- ・広島県立美術館との締結にもとづいて、コレクションの相互活用、人材交流等を図る。
- ・展覧会調査や学会出席等情報収集に努める。
- ・インターンシップを受け入れる。

(3) 特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用します

- ・コレクションを活用した企画展を積極的に開催する。
(「富士山の絵画」展、「静岡県立美術館所蔵 二見彰一」展)
- ・「県立美術博物館設立基金」を活用し、黒田清輝《富士之図》を購入し、「富士山の絵画」展会期中に展示する。
- ・購入・寄贈候補作品に関する情報を積極的に収集し、日常的な調査に努める。
- ・エントランス名品コーナーで富士山をモチーフとする絵画を紹介する。
- ・これまで以上に、テーマに工夫を凝らした収蔵品展を開催する。

<平成 25 年度収蔵品展開催計画>

展覧会名	期 間	展示する収蔵作品など
新収蔵品展	7/13～8/25	平成 24 年度新収蔵品
挿絵・書籍の愉しみ	8/27～10/6	ジャン・バルボー『最も美しき古代ローマのモニュメント』より
佐伯祐三、里見勝蔵と独立の画家たち	10/8～11/24	佐伯祐三《ラ・クロッシュ》
『グループ幻触と石子順造』展プレ企画 前衛の駆け抜けた頃	11/26～1/19	元永定正《作品》
大地から一日本画の情景	1/21～2/23	狩野永岳《四季耕作図屏風》
没後 150 年 福田半香とその師友	2/25～3/30	福田半香《李白観瀑図》

【運営基本方針 B】

地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

(1) 質の高い芸術教育と普及プログラムを開発します

- ・今後の教育普及の方針について検討する。
- ・鑑賞との結びつきを深め、質の高い鑑賞系、実技系教育普及事業を実施する。
- ・学校教育の現場との交流を図り、鑑賞系教育普及事業をより充実させる。

<平成 25 年度 教育・普及プログラム 主な内容>

プログラム	内 容	実施日数等 (予定)
創作週間	実技室とその設備を創作活動のため県民に開放する	年 49 日
わくわくアトリエ	親子でも参加できる美術体験企画として、さまざまな技法で共同制作、展示を行うワークショップ	年 5 日
絵の具開放日	親子で参加し、絵の具で自由に遊ぶ体験の日	年 7 日 14 回

粘土開放日	親子で参加し、粘土で自由に遊ぶ体験の日	年12日36回
美術館教室	学校連携普及事業 来館園児・生徒を対象とした実技・鑑賞のプログラム	年63日130回
出張美術講座	コレクションのレプリカやPC資料を持参して、小～大学まで幅広い年齢層を対象に、県内全域の学校で授業を実施	年20回
ちょこっと体験講座	展覧会をみにきた方に、どなたでも15分で体験できる技法体験コーナー（エントランスにて年7回、絵画、シルクスクリーン、銅版画、木版画、日本画等の体験）	年29日

(2) 講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を企画し開催します

- ・企画展に合わせ、創意工夫を凝らした講演会、シンポジウム等を開催する。
- ・収蔵品展や企画展の美術講座及びフロアレクチャー等を実施する。

(3) 地域住民、企業、NPO等と連携した美術館活動を充実させます

- ・企業からの支援・協力の可能性について模索する。
- ・静岡県内の美術館と連携した「Kids Art Project」を全県下で展開する。
- ・「ムセイオン静岡」を定期的に開催し、市内文化施設6機関の連携を深める。
- ・静岡大学をはじめとして、県内大学との連携を強化する。
- ・ボランティア活動の質を高め、地域連携活動を支援し推進する。

【運営基本方針C】

さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます

(1) 広報戦略を策定し、広報の質を高めます

- ・北海道大学大学院教授・佐々木亨氏と共同して、未来館者の実態と傾向を把握し、中長期的な当館の運営指針に資するものとする。
- ・「静岡県立美術館広報委員会」を運用して、戦略広報の策定・実施及び企画展等の事業ごとの広報を積極的に行う。
- ・諸機関と連携して、新たなニュース・リソースを生み出すための素材を開拓する。

(2) 観光業界などとの連携や新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます

- ・県文化・観光部を中心として、観光諸団体との連携を進める。
- ・評価結果を活かし、企画展及びイベントの内容に応じて、マーケティングをして、より効果的な告知先を検討する。

(3) ロダン館の認知度を高め、来館者を増やします

- ・県文化・観光部と連携し、ロダン館の観光ルート化に向けた取組を行う。
- ・コンサート等の事業を通して、ロダン館の魅力を発信する。
- ・ロダン館のより分かりやすい展示・解説について検討する。

【運営基本方針D】

常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます

(1) 館内施設を充実させ、満足度を高めます

- ・引き続き「カフェ・ロダン」の利用者満足度の向上に努める。
- ・レストランの更なるサービス改善に努める。
- ・空調設備等の施設の改修に向けた検討を行う。

(2) 周辺環境やアクセスの利便を向上させます

- ・バス等の公共交通機関によるアクセスの改善について関係機関に要請する。
- ・美術館の将来構想や周辺環境の整備について検討する。

3 平成 25 年度以降の達成目標

	評価指標	H19 実績	H20 実績	H21 実績	H22 実績	H23 実績	H24 実績	H25 目標
運営基本方針A 人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を催します								
重点目標 1 新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します								
1	展覧会の来館者数(人)	184,535	190,669	119,416	266,786	128,326	163,533	170,000
2	自主企画・企画参加型展覧会の回数(回)	3	4	2	3	4	5	4
3	作品やテーマに興味を持った人の割合(%)	87.5	86.0	80.9	85.2	85.7	88.7	88.0
4	展覧会における新規来館者の割合(%)	19.7	17.3	21.4	21.5	15.7	19.5	20.0
重点目標 2 他の美術館・大学との連携・交流を進め、企画力を強化します								
6	調査研究の発表件数(回)※	※10	14	11	14	18	11	10
7	内部セミナー・研究会・研修の回数(回)	12	12	14	12	22	12	14
8	他の美術館・大学と連携した取組件数(件)	3	5	4	3	3	5	5
重点目標 3 特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用します								
10	収蔵品展の観覧者数(人)	18,196	17,850	18,042	12,526	14,506	9,517	21,000
11	収蔵品の公開件数(貸出し含む)(件)	465	446	496	337	647	143	500
12	作品購入件数・購入価格(件・千円) ()内は、基金対応額	2 29,896	3 12,757	3 133,350 (113,400)	4 8,450 (86,000)	1 5,000	2 5,000	—
13	作品寄贈件数・評価価格(件・千円)	23 26,435	47 69,625	20 22,950	2 92,500	36 35,750	17 42,300	10 10,000
運営基本方針B 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します								
重点目標 1 質の高い芸術教育と普及のプログラムを開発します								
15	学校教育と連携した取組数(件)	290	385	305	348	530	297	350
16	鑑賞系プログラム数(件)	11	15	13	13	20	19	13
17	コレクションを活用したプログラム数(件)	14	16	17	19	19	19	16

平成 19 年度以降は、カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表等を積算している。

(それまでは、執筆した論文、携わった展覧会・教育普及活動、その他専門領域活動を含めている。)

評価：指標		H19実績	H20実績	H21実績	H22実績	H23実績	H24実績	H25目標
重点目標2 講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を充実します								
19	講演会等の開催回数（回）	214	211	240	177	170	174	210
20	学芸員のフロアレクチャー等の数（回）	16	17	58	123	105	92	120
重点目標3 地域住民、企業、NPO等と連携した美術館活動を充実させます								
21	地域住民等と連携した取組数（件）	2	10	6	6	6	8	4
22	館内空間を生かした催事の件数・参加者数（件・人）	90 5,400	101 4,054	34 6,506	62 4,908	83 13,929	59 13,901	90 5,500
運営基本方針C さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます								
重点目標1 広報戦略を策定し、広報の質を高めます								
24	美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合（%）	67.9	69.8	66.5	69.4	70.6	71.6	70.0
25	ホームページへのアクセス件数（件）	164,500	164,000	147,225	353,500	419,000	370,660	170,000
26	ホームページの満足度（%）	70.0	74.3	71.9	74.3	71.7	71.6	75.0
重点目標2 観光業界などとの連携や新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます								
27	観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数（件）	-	-	-	-	5	1	2
重点目標3 ロダン館の認知度を高め、来館者を増やします。								
29	ロダン館の入館者数（人）	74,290	81,771	45,751	131,240	63,102	26,809	80,000
運営基本方針D 常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます								
重点目標1 館内施設を充実し、満足度を高めます								
30	美術館利用者数（内訳）（人）	373,556	389,194	221,185	459,489	284,097	304,654	400,000
31	鑑賞環境に対する満足度（%）	87.1	87.4	84.4	89.8	90.4	92.5	90.0
32	レストラン・カフェ利用者の満足度（%）	61.7	54.5	68.8	53.8	71.3	81.4	70.0
33	ミュージアムショップ利用者の満足度（%）	76.9	80.6	84.8	85.6	86.8	82.8	85.0
2 周辺環境やアクセスの利便を向上させます								
34	来館者のアクセス満足度（%）※	78.1 80.1	76.4 80.7	78.0 75.8	75.8 72.0	81.8 69.2	80.0 83.1	80.0

※ 実績の上段：公共交通機関で来所した方、下段：自家用車で来所した方

展覧会に関する自己点検評価表

- 1 「静岡県立美術館コレクション カラーリミックス」展
- 2 「日本油彩画 200年」展
- 3 「ユベール・ロベール」展
- 4 「江戸絵画の楽園」展
- 5 「インカ帝国」展
- 6 「維新の洋画家 川村清雄」展

【参考資料 2】

平成 24 年度調査・研究に関する自己点検評価報告書
